

会議録

会議名 (審議会等名)	令和7年度 第1回相模原市スポーツ推進審議会			
事務局 (担当課)	市民局 スポーツ推進課			
開催日時	令和7年10月20日(月) 午後3時00分～午後5時00分			
開催場所	相模原市役所 会議室棟2階 第3会議室			
出席者	委員	11人(別紙のとおり)		
	その他			
	事務局	4人(スポーツ推進課長 スポーツ施設課長 他2人)		
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可		傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由				
会議次第	1 あいさつ 2 議題 (1) 相模原市スポーツ推進計画の進行管理について 3 その他			

審議経過

主な内容は次のとおり（○は委員の発言、●は事務局の発言）

1 あいさつ

開会に先立ち、スポーツ推進課長からあいさつを行った。

2 議題

（1）相模原市スポーツ推進計画の進行管理について

事務局から各基本方針の資料説明を行った後、次のとおり発言があった。

【基本方針1】

- （安井会長）30歳代の実施率が半数を下回っているが、この年代は小さいお子さんを育てている年代だと思う。小さいお子さんを持つ世代で、時間や心の余裕の面からスポーツをするのが難しいのでは。ただ、この年代の健康づくりは40歳代以降にも影響してくれる。働き盛りの世代には健康であってほしい。ご意見はどうか。
- （高橋委員）私自身テニスをしているが、若い人はあまり来ない。テニス教室を開いても30代の参加はなく、来るのは50代や、若くても45歳くらい。上は80代の方が来る。昔に比べて定年退職の年齢が上がり、60代や70代まで働く人も多く、そういった点からも参加しにくくなっているのではないかと感じる。
- （安井会長）いろいろ原因があるのだろうが、ある種コロナの影響を引きずっているのではないか。もう一度“やってみようかな”と思えるような新しいきっかけづくりが必要だと思う。過去にも東洋の魔女がバレーで金メダルを獲ったことで、女性のスポーツ実施率が上がった例もある。相模原でも金メダリストが出れば、それをきっかけにスポーツを始める人が増えることが考えられる。そうした機会をとらえられると、状況が好転するのではと思う。
- （木下委員）公民館でも様々な体育事業を行っているが、従来の形式で実施しても参加が難しくなっており、役員を出すことも簡単ではなくなってきているため、スポーツフェスティバルとして形を変えて開催したり、1日開催を半日にしたり、様々工夫してい

る。ソフトボール大会を開催するにしても、以前は自治会から12チーム程度出場していたが、今は4チーム程度しかいない状況。地域のコミュニティが希薄化していることが背景にあるのだと思う。公民館を活動場所にして、ダンス、卓球や体操を行う高齢者は多い。20人定員でイベントを開くと、70歳以上が9割、60代が1、2人という状況である。親子で参加できる企画をしても、子どもは習い事で忙しいし、やらない子はやらないため、二極化している。

○（安井会長） そうしたイベントはいざ参加すると面白いが、参加するまでの1歩がなかなか踏み出せないもの。親子参加型で参加率を上げるには、小さいお子さんを預かるサービスもあるとよい。

○（吉原委員）先日の10月13日に、さがみはらスポーツフェスティバルがあり、フライングディスクのブースを担当した。参加者には未就学児が多く、中学生はほとんどいなかった。中高生になると、市主催のこうしたイベントに来なくなってしまうことはさみしく感じる。アリオ橋本でバスケ関連のイベントを開催した際は、1日で200人程度の参加があり、中高生や買い物中のお母さんたちも来てくれた。

○（安井会長）中高生になると習い事が多様化するのだろう。イベントは全世代に参加してもらうのもよいが、ターゲットを未就学児に絞るというのもそれはそれでよいと思う。

○（鈴木委員）イベントに車で行くことができると、参加しやすくなるので、駐車場の有無は重要な要素である。また、アンケート調査の際、運動ができる状態にあるかどうかを質問するとよいのでは。身体的や精神的に、運動したくてもできない人が潜在している可能性がある。運動できない理由も聞いたほうが、原因解明に繋がる。

○（安井会長）確かに車のアクセスできるというのは、一つの改善策である。また、アンケートについて、倫理的な点で、回答者の個別事情を質問するにあたっては配慮が必要である。

○（鈴木委員）配慮としては、「いま、運動できる状態ですか。」という聞き方にするなどがある。

○（安井会長）また、原因解明のための具体策がなかなか出てきていないというのが現状としてあるのだと思う。働き方改革が叫ばれている日本社会でも、9時5時で仕事を終えるというのはまだ難しい。

- （鈴木委員）本学として福利厚生をどうしようかという動きがある。運動施設を確保するというところから課題となっている。
- （市川委員）総合型地域スポーツクラブやスポーツ推進委員として活動している中で、「スポーツ」という言葉を聞くと、ハードルが高いと感じてしまうという声を聞いた。先日公民館でスポーツ祭りを開催したが、スポーツは遠慮するが模擬店があるなら参加しようという人がいた。私が勤めていた頃、会社でテニスをしていた。サラリーマンでも1駅歩くなど、そういうレベルで身体を動かしている人はきっといると思う。そういう人も含められるとよいのでは。
- （安井会長）確かに、中には「スポーツ」と聞くとネガティブな印象を持つてしまう人がいるが、実際にはスポーツは健康に繋がるというプラスの側面もある。スポーツは、市民の皆さんに健康で豊かな生活を送ってもらうための一つのツールである。私としては、スポーツという言葉をなくすのではなく、もっと気軽なものとして認知してもらう働きかけが必要だと思う。現在、日本には文科省の下にスポーツ庁と文化庁があるが、ヨーロッパではスポーツ省として設置し、予算も莫大につけて、国民の活動のなかにスポーツが確立されている国もある。日本においても、スポーツというものがもっと身近なものになってほしいと思うので、スポーツはもっと気軽にできるものという意識に変えていくのがよいと思う。

【基本方針2】

- （安井会長）年代的に、30代は子育て世代で、50代60代が実働の中心世代になるのだと思う。私の学部の学生もそうだが、積極的に地域ボランティア活動に参加しようという学生が増えているというのも事実である。鈴木委員や私の大学の学生が、これまで以上に積極的にかかわることが増えれば、この成果指標が向上するのでは。特に相模原市は複数の大学が所在しているので、人的リソースは掘り起こし次第で活用できる可能性を秘めていると思う。我々が学生の時は「する」側面が強かったが、今は「みる」「支える」側面にどんどん移行している。ボランティア活動をしているということが、一つのステータスになっている。

- （市川委員）先ほど話したスポーツ祭りに、青山学院大学のフードドライブの取組で参

加いただいた。地元のイベントに若い学生に来てもらうと、雰囲気が明るくなって、とてもよいことだと思う。

○（安井会長）本学の学生は地域実習という形で、大野北公民館で定期的に実習を行っている。大学生は大きなパワーになると思う。

○（勝又委員）ラグビー関係で言うと、ボランティアが減ってきてている。と言うのも、運営体制が変わったからである。リーグワンというリーグになってから、運営従事者を雇う形になった。このことも、ボランティア参加率の低下に影響しているのでは。

○（安井会長）スポーツを盛り上げる意味では、応援者であるボランティアは必要な人材。ただ、ボランティアをしながらでもスポーツを観られることや、そのスポーツ自体の魅力や認知度を上げるという工夫も、ボランティア参加率の向上には必要なことだと思う。

○（勝又委員）ラグビーワールドカップの後は、ボランティアがとても増えたが、その後コロナ禍に入り、その後が続かなかった。スポーツ自体の認知度は大きな要素である。

○（鈴木委員）来月から東京でデフリンピックが開催される。ボランティアに応募しようとしたら、すでに足りているという話を聞いた。来年算出される令和7年度の数値は上がっている可能性もある。

○（安井会長）実際に値が上昇したとしたら、そうしたイベントの影響は大きいのだと思う。

○（高橋委員）感想になるが、「誰もが身近にスポーツを楽しめる場の充実」の点で、相模原駅北口の跡地にスタジアムが建設されないというのは残念。良い立地でいろいろな試合をすると、観戦者だけでなくボランティアも多く来場すると思う。

【基本方針3】

○（安井会長）令和5年度から6年度にかけて、スポーツが好きな児童生徒の割合が数字上は微減しているが、必ずしも実情と合致しているかというとそうとも言い切れない。週3回以上スポーツを行うという定義があるが、かなり熱心に取り組まなければ目標値の達成に届かない。実際に本学の学生が陸上競技を教えに行くが、子どもは運動が好きと感じている一方で、運動をする機会が十分ではないと感じている。

運動部活動の加入率の全国平均は、中学生は約7割で、高校だと約5割になる。逆算

していくと、小学生年代は加入率が比較的高い。子どもたちは身体を動かす習い事が身近にあり、関心もある。特に共働きの家庭の子は、週5で何かしらの習い事に通っている傾向にある。こうしたことを情報として周知させていただく。

○（古屋委員）指標1のスポーツが好きな児童生徒の割合を向上させたいという気持ちは個人的にもあるが、市内中学校部活動の指針で、活動日数は平日3日以内、土日はどちらかの半日と定められている。クラブチームだけでなく学校部活動にも加入している子が、部活の大会に出場したいという場合でも、なるべく出場できるようにしている一方で、そのための教員のマンパワーが圧倒的に不足している厳しい状況もある。こうした実情と、週3回以上という目標とで折り合いをつけていかないといけないと感じる。体育の先生は、子どもたちが運動を好きになったり、能力が向上したりするために体育の授業にかなり力を入れているので、体育授業の視点も加えるとよいのでは。

○（安井会長）週3回以上ではなく、週1回や週2回で分析していくと違った見え方ができるのかもしれない。また、体育は学校教育の中で正課であり、部活動は課外活動である。本来であれば体育がしっかりとしないといけない。古屋委員のおっしゃるように、体育に力を入れている学校もあるので、その点を視野に入れた項目に今後していくとよいかもしれない。ただ、令和2年度からの調査項目に手を入れると過去との比較ができないくなってしまうので、これまでの調査は継続するとして、追加項目を併記することが考えられる。指標の値が横ばいと言ってもよい状況なので、そろそろ別の物差しで比較するのもありなのでは。

【基本方針4】

○（安井会長）ホームタウンチームの観客数は、経済的なところだけでなく、市民の熱狂ぶりの評価にもなると思う。相模原市に拠点を置いた全国的なスポーツチームとしては、本学の箱根駅伝の優勝パレードも大変盛り上がる。おそらく市民のスポーツに対する理解はある程度高く、自分たちの街の中に強いチームがあって盛り上がるという土壌があるのだと思う。観客数が増えているというのは、チームへの期待の表れでもあると思う。テレビ放送やネット配信が積極的に行われると、「観に行ってみようか」という気持ちになる。そしてチームが強ければ「勝てるかもしれない」と思って、さらに引き込まれる。

先ほど話題の出たラグビーを例に出すと、ダイナボアーズが強いという認知が広まり、観客が増える。相模原市に拠点を置いているチームを応援したいし、チームばかりに責任を負わせるのではなく、地域で支えて強くするという気持ちは必要である。その意味でも、イベント等で地域とチームの距離感を縮めるというのも重要である。

○（木村委員）よい取組だと思うのが、小学生の娘がホームタウンチームの試合観戦のチラシを学校から持ち帰ってくることがある。どういうルートで子どもたちに渡っているのか。

●（スポーツ推進課）ホームタウンチームにチラシを用意していただき、スポーツ推進課から各学校を通じて送付している。スポーツにまつわるものであれば何でも配布することではなく、あくまでも市が認定したホームタウンチームのPRのため、学校にご協力をいただいている。

○（木村委員）一市民としては、情報が届くというのがありがたい。本日の基本方針1～4においても、こうした取組をしているというのを知るだけでも意識が変わるし、学校を通じたホームタウンチームのチラシ配布は有効な手段だと思う。

○（安井会長）プロ選手のプレーを子どものうちから観られるというのは非常にありがたい話である。

○（久保委員）津久井ブロックの家庭教育事業として、ノジマステラ神奈川相模原の選手にお越しいただいて夢をテーマに講演いただくことがあったが、その告知をしたところとても反響があった。私の在籍する中野中学校はサッカー部がない。ただ、サッカーをやりたい子どもはたくさんいる背景から、ノジマステラにお越しいただいた。ノジマステラは教育に熱心で、お呼びしてよかったです。

○（安井会長）ホームタウンチームがこうした活動をしているのは非常に大きい。相模原市に拠点を置いているスポーツチームという意味で、市が認定した4チームだけでなく、本学なども含めて、こうした団体がもっと活発に小中学校の授業に参加する等すると、一つの道徳教育的な部分にも繋がると思うし、子どもたちにとっても多様な教育ツールになると思う。

○（鈴木委員）私が住んでいる町田市の学校では、チラシ配布ではなくインターネット経由で情報が発信されているが、相模原市のようにチラシ配布するというのはよい。

- （市川委員）昔はスポーツ少年団の部員募集チラシを学校で配布していただいていたが、働き方改革の波があり、今では配布が難しくなっている。
- （久保委員）同じ悩みを抱えている。津久井のお祭りに地域の野球チームに出展いただいて、部員募集のチラシを来場した子どもたちに配布できた。
- （市川委員）私の地域でもスポーツ祭りで同じことをして、チラシがきっかけでチームに連絡が入った事例があった。私たちなりに周知方法を考えているが、学校を通じた配布は難しくなっている。
- （スポーツ推進課）補足説明として申し上げると、働き方改革が裏にあると思うが、紙で配布することの一定の効果がある一方で、学校としても対応に困ってしまうと伺っている。学校なりの事情もあると思うので、できる方法を探っていくことになると思う。
- （鈴木委員）あるプロ野球チームの広報スタッフに聞いたが、どこに注力するかというと、小学校低学年と未就学児にターゲットを絞るとよいとのことだった。
- （安井会長）公立学校だと様々な事情で難しいのだと思うが、例えば学校にチラシを置かせていただくにしても、時期を絞るなど工夫をすれば可能性があるのだと思う。やはり人集めとなるいろいろな方法を模索する必要があり、SNSの活用なども含めて、人集めのための機会を作っていくとよいのではと思う。
- （鈴木委員）アンケート調査の結果は区ごとに取っているのか。
- （スポーツ推進課）基本方針3の調査を除き、在住している区も回答してもらっているが、本審議会で配布している資料にはその情報を掲載していない。
- （安井会長）細かく見ていくと地域ごとの違いが見えてくる可能性もあるが、年次的な比較をする点でご判断いただければと思う。もし今後地域ごとに差異が目立つことであれば、その視点での検討も必要かと思う。
- （木村委員）情報発信の点で、30代、40代は2次元コードがあると情報を仕入れやすいので、今後の取組に生かしてもらえるとよい。
- （安井会長）一口に周知すると言っても、紙で持たせたほうがよい場合とインターネットで見せるほうがよい場合があるので、状況に応じて使い分けるのがよい。

【その他】

本日の内容に対する審議会としての意見は、会長一任で作成するということで異議はなかった。

事務局から、令和10年度以降を計画期間とする次期スポーツ推進計画の策定作業を令和8年度～9年度の2か年で行うこと、その策定作業ではスポーツ推進審議会の委員からご意見をいただきたいことを伝えた。また、今年度の第2回審議会を令和8年3月下旬に予定していることを伝えて閉会した。

以上

相模原市スポーツ推進審議会出席名簿

	氏 名	所 属 等	備考	出欠席
1	安井 年文	学識経験者（青山学院大学教授）	会長	出席
2	鈴木 秀知	学識経験者（桜美林大学教授）		出席
3	齋藤 仁美	学識経験者（トップアスリート）		欠席
4	高橋 修一	公募市民		出席
5	木村 有美	公募市民		出席
6	西岡 直子	(一社) 相模原市医師会		欠席
7	勝又 修	(公財) 相模原市スポーツ協会		出席
8	古屋 礼史	相模原市小・中学校長会代表者会		出席
9	久保 武史	相模原市P T A連絡協議会		出席
10	上條 利夫	相模原市スポーツ推進委員連絡協議会	副会長	出席
11	木下 泰雄	相模原市公民館連絡協議会		出席
12	吉原 君子	(特非) 相模原市障害児者福祉団体連絡協議会		出席
13	市川 裕子	総合型地域スポーツクラブ (あそべーる大沼クラブ)		出席
14	古薙 雄士	ホームタウンチーム (ノジマステラ神奈川相模原)		欠席